



農家の庭先がJAの窓口 (上)

ゲスト/山下 良行 (鹿児島県JA南さつま 代表理事組合長)

第33回ゲスト

鹿児島県 JA南さつま 代表理事組合長
山下良行



やました・よしゆき
1956年鹿児島県生まれ。1978年加世田市農協入組。1993年南さつま農協加世田支所勤務を経て、2006年JA南さつま金融共済部長、2008年参事(管理、金融・共済担当)、2014年参事(総務、金融・共済担当)。2014年常務理事、2017年代表理事専務を経て、2020年代表理事組合長に就任。

●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭



いしだ・まさあき
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。



JA南さつま（南さつま農業協同組合）

鹿児島県の南西部に位置し、南さつま市（加世田、笠沙町、大浦町、坊津町）、枕崎市、南九州市（知覧町、川辺町）を区域とする。「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」の実現に向けて、組合員との対話をすすめながら、産地づくり10年ビジョンの実践など、将来を見据えた農業振興・産地育成に取り組んでいる。



●組織の概況

組合員数：12,873（正組合員：5,770、准組合員：7,103）

役員数：24（常勤・非常勤含む）

職員数：427（臨時職員含む）

設立：1998年3月

本店所在地：鹿児島県南九州市知覧町郡
17285番地

出資金：31億3千万円

貯金：1647億8千万円

貸出金：244億3千万円

長期共済保有高：4089億円

購買品供給・取扱高：107億円

販売品販売・取扱高：150億円

（2022年度実績）

●地域と農業の概況

温暖な気候と山間冷涼を生かした茶の生産が盛んで、全国茶品評会で南九州市が4年連続産地賞に輝く。また、かぼちゃ、砂丘らっきょう、知覧紅さつまいも、きんかん、たんかんの産地で、かごしまブランド産地の指定を受ける。畜産では、「鹿児島黒牛」「かごしま黒豚」や採卵鶏の飼育生産が行われている。

農家の庭先がJAの窓口

JA南さつまは、営農部門、茶業部門、畜産部門、経済部門、金融共済部門、経営管理部門の6事業部門で構成されるが、<農業づくり><くらしづくり><ファンづくり>にかかる諸課題は、これら事業部門間の連携で取り組まれている。JA職員は横をみながら仕事をしろ、とよくいわれるが、その体制が日常業務のなかで構築されている。

■事業部門間の連携で共通課題に取り組む

石田：「産地づくり10年ビジョン」、正確には「JA産地づくり10年ビジョンの実践と農家経営支援」というものをおつくりになっていますね。この説明からしていただけますか。

山下：はい、わかりました。このねらいは、高齢化が進み、作付面積や生産額が減少しつつあるというなかで、農業基盤はこれをしっかり守っていきたい。そのための10年ビジョンという位置づけです。主要農産物17品目のそれぞれについて、経営支援なり事業支援、機械・施設等の更新をどうすすめていくか、PDCAを回しながら進めようというものです。今年(2023年)で2年目になります。

JA内に推進本部を設けまして、年1回、県の地域振興局、3市(南さつま市・枕崎市・南九州市)、経済連、中央会の担当者の方々にお集まりいただき、営農指導員を中心にJA側が取り組み状況を説明するとともに、翌年へ向けてのご意見やご助言を頂戴しています。

石田：17品目とは何ですか？

山下：水稲、青果用・加工用甘しょ、工業用甘しょ、かぼちゃ、人参、メロン、らっきょう、ピーマン、加工大根、オクラ・ブロッコリー、みかん、キンカン、タンカン、花卉などの17品目です。JAでは専務を中心に会議体をつくってい



かぼちゃの生産量は年間400トンを超える



知覧茶は4年連続で産地賞を受賞している
(写真/JA南さつま)

て、四半期ごとに進捗管理を行っています。17品目それぞれについて現状維持を図ることも重要ですが、JAとして今後伸ばしていきたい、アピールしていきたい、という重点品目の生産振興を図ることも重要と考えています。

石田：今後伸ばしていきたい重点品目は何ですか。

山下：何といってもお茶です。販売高(2022年度)でいうと、野菜類15.5億円、果樹類2.3億円、米・甘しょ・雑穀4.2億円で、その合計は22.0億円ですが、お茶は買取販売品を含めて47.3億円にのぼります。このほかに畜産が78.8億円あります。

当JAの機構からいうと、野菜・果樹・穀類等を担当する「営農部門」、茶を担当する「茶業部門」、牛・豚・鶏卵を担当する「畜産部門」の3事業部門に分かれています。これらに加えて、生産資材・燃料機械を担当する「経済部門」、金融・共済事業を担当する「金融共済部門」、経営企画・くらし広報・人事総務等を担当する「経営管理部門」の3事業部門があります。合計で6事業部門から成り立っています。

じつは、先ほど説明した「産地づくり10年ビジョン」の17品目は野菜・果樹・穀類等を担当する営農部門の課題になりますが、ビジョンづくりそのものは営農部門だけに留まりません。茶業部門や畜産部門、経済部門など、そのほかの事業部門でもビジョンづくりを行っています(表「JA南さつまの事業実施体制」を参照)。

表 JA南さつまの事業実施体制 (2023年度)

	営農部門	茶業部門	畜産部門	経済部門	金融共済部門	経営管理部門
<農業づくり>						
JA産地づくり10年ビジョンの実践と農家経営支援	13(52)	7	6(4)	1	2	
組合員の収入拡大・コスト抑制対策	7	6	4(8)	5		1
組合員を支え、農業が持続される仕組みづくり	3	1	(3)	1	2	
農業政策の確立と安心・安全な農畜産物の提供	3	2	2			
<くらしづくり>						
組合員の結集力強化による参加・参画の促進	2	1				3
協同組合と総合事業の強みを発揮したくらしの支援				4	6	3
<ファンづくり>						
JAグループが一体となったJA・協同組合・SDGsに関する情報発信					1	5
<ひとづくり>						
組合員の組織活動への参加促進と学習の場の提供						1
JA役職員の協同組合人力・考動力の向上につながる教育研修の実践						7
人財育成を支える職場づくりと職員確保対策						6
<JAづくり>						
JA経営基盤の強化			1(2)	9	15	13

注1) 数字は当該事業部門の共通施策数、カッコ内は品目ごとの施策数。

注2) 2023年5月26日開催の「第25回通常総代会資料」から筆者作成。

いいかえれば、「産地づくり10年ビジョン」という課題は事業部門間で共有されていることになります。

ちなみに金融共済部門の施策は2つあって、①担い手の資金ニーズへの対応力を強化するとともに、農業所得の向上や持続可能な収益基盤の確立を目指し訪問活動を徹底します。②営農部門との定例訪問共同会議の開催により農家の経営安定を支援します、というものです。

石田：なるほど。事業部門間の関係プレーというか、横ぐしを刺すというか、組合員の立場に立った事業実施体制を構築しているわけですね。縦だけではなく、横をみながら仕事しろ、とよくいわれますが、そうした体制が実態としても担保されていることになります。すばらしいです。

山下：「産地づくり10年ビジョン」をはじめとして、事業部門間で共有すべき課題は合計11課題に及びますが、これらは<農業づくり><くらしづくり><ファンづくり><ひとづくり><JAづくり>に分類されています。この分類の意味するところは、<農業づくり><くらしづくり><ファンづくり>のためにJAの事業や活動があること、また、その事業や活動を支えるものとして<ひとづくり><JAづくり>があることを表しています。

■わが地域農業の誇り

石田：JAの重点品目にお茶があるという話がありました。当地のお茶は「知覧茶」としてブランド化されていますね。

山下：そのとおりです。昔は知覧町(現南九州市)のお茶だけが「知覧茶」とされていましたが、2007年に南九州市が誕生したことから、現在は穎娃(えい)・知覧・川辺の旧3町のお茶をすべて「知覧茶」としています。

2023年3月現在、南九州市には茶園3,419ヘクタール、茶農家593戸、茶工場101があります。荒茶生産量1万3,332トン是国内生産量の17パーセント

を占めていて、全国市町村のなかでナンバーワンの生産量となっています。

JAの本所ならびに知覧茶業センター(製茶・販売拠点)は、戦時中に特攻基地だった知覧飛行場の跡地(高台)にあります。その周りを茶園に囲まれる知覧茶の中心地となっています。

石田：みごとな景観です。平坦地なので効率的な生産が可能ですね。



JA茶業センターで知覧茶のさまざまな商品が販売されている

山下：知覧茶は、全国茶品評会で普通煎茶部門の産地賞(出品茶の審査成績上位3点の合計審査得点が最上位の市町村)を4年連続で受賞しています。

2023年度の第77回全国茶品評会の審査結果をみますと、第1位は鹿児島県霧島市の(有)みぞべ五光が200点を獲得しましたが、第2位から第5位までは南九州市の生産者が占めています。第2位は(株)栢川製茶で199点、第3位は(有)宮原光製茶で198点、第4位は(農)大隣岳茶生産組合で197点、第5位は(農)菊永茶生産組合で195点となっています。ここまでが、農林水産大臣賞などの特別賞の対象となっています。

このうちの栢川製茶(代表 栢川克可：はしかわかつか)は、2023年度の第62回農林水産祭の農産・蚕糸部門で最高賞の天皇杯を受賞しています。茶産地のJ Aとして、こんなにうれしいことはありません。栢川さんは全国茶品評会をはじめ各品評会において、これまでに農林水産大臣賞を12回も受賞しており、その名を全国に知られる茶農家です。おじいさんの代から受賞してきた実績が認められての天皇杯でした。

石田：そのおじいさん、写真をみるとすでに亡くなられていますね。

山下：おじいさんだけではありません。お父さんも亡くられており、現在はおばあさん、お母さん、長男と次男の2組の夫婦でお茶をつくっています。男性2人、女性4人という構成です。

天皇杯の受賞理由をみますと、受賞者の特色の一つとして「女性の活躍」が掲げられています。芽の伸育を見極めて被覆時期を決定するなど、品質向上に果たす女性の役割は大きく、また消費者目線に立った仕上茶の商品開発やホームページによる通販の実施、月に一回のお客様向けのお茶便りの発行など、販売面でも大きな役割を果たしていると記されています。

石田：場所はどこですか？

山下：知覧町北部の後岳(うしろだけ)地区にあります。この地区は気温が低い山間地にありますが、栢川さん一家は、ほ場造成を行って乗用型機械化体系による省力化と低コスト生産、土壌診断にもとづく有機質を主体とした施肥による土づくりに取り組み、高品質の茶づくりに成功しました。

石田：立派ですね。条件が悪いというのは言い訳にならない、という典型的な事例だと思います。

山下：産地J Aとして誇れるのはお茶だけではなく。販売高



かぼちゃは部会で完熟出荷を徹底している

は大きくはありませんが、「加世田のかぼちゃ」は〈かごしまブランド〉の第一号となりました。いまから三十数年前、1991年のことです。春作(5月中旬～7月中旬)の大半はハウス内でかぼちゃを吊り下げて栽培します。市場評価は高いのですが、管理がとても大変で、生産者、栽培面積ともに減少傾向にあります。

石田：今日の午前中、加世田野菜集選果場で加世田園芸部会の部会長、外園公博さんにお会いしました。手間のかかるかぼちゃをお一人で生産されていると聞いて、びっくりしました。

山下：出荷基準は厳しく、受粉してからの60日間、いつ受粉したかを記した札を、一つ一つ、つるに付けています。また、完熟品の出荷を徹底するために、収穫前に試し切りをして、JAの担当者が果肉の色合いや種の硬さなどを確認してから「出荷OK」が出ます。

このように多くの手間をかけることによって、糖度が高く、皮が薄くて柔らかい、果肉は厚くて鮮やかなオレンジ色をしている、そんな極上のかぼちゃが出来上がります。

文字どおりの希少品ですから市場価格も高く、普通の八百屋さんではなかなか扱えません。主に専門店・料亭向けの高級食材となっています。

石田：確かに、出荷は大阪、東京、金沢だけとお聞きしました。

■ どうする「サツマイモ基腐病問題」「物流2024年問題」

石田：地域農業が抱える問題として、でん粉工場の集荷問題というか、原料イモをめぐる焼酎用とでん粉用の競合問題がありますね。

山下：2018年にサツマイモの基腐病が発生して以来、県内のサツマイモ生産量が大きく減り、でん粉用の集荷量が激減しています。生産量そのものが減ったことに加えて、焼酎用に流れたことによります。

わたしどもは、JAいぶすき、JA南さつま、JAさつま日置の3JAが、協同事業体のでん粉工場として、JA南薩拠点霜出澱粉工場(知覧町霜出)を2011年に設置しました。製造工程管理、衛生管理の充実した最新鋭の工場です。

生産されるでん粉は「薩摩甘伝(さつまかんでん)」と名付けられ、経済連・全農を通じて国内はもとより、韓国にも輸出しています。風味と色味にすぐれているため、韓国では春雨の原料として利用されます。

サツマイモ基腐病が出る前は1.5万トンを集荷していましたが、今年は5千トンまで減ってしまいました。基腐病に強い多収性新品種として『こないしん』を導入したのですが、焼酎用にも使えることがわかり、そちらへ流れるようになってしまいました。

現状、でん粉用は甘味資源作物交付金を加えてもkg単価が47～48円なのに対して、焼酎用は80円から100円で引き取られています。生産者とは出荷契約

を結んでいます。契約を盾に生産者を追い込むことは適当ではありません。国には交付金の増額をお願いしていますが、あまりにも価格差が大きいので、でん粉工場の存立に関わる大問題となっています。

石田：別の産地で聞いた話ですが、酒造メーカーは、出入りしている運送業者等に依頼して、原料イモの収穫と工場搬入を行っているようです。そうすると畑段階で勝負がついてしまいます。

山下：そのとおりです。酒造メーカーにとっても死活問題ですから、必死になって集めています。

今後の対策として考えられるのは、第1に根本原因である基腐病の根治をめざすことです。そのためには、新品種『こないしん』『みちしずく』の普及促進を図るとともに、栽培技術・病害虫(基腐病など)の防除検討会を行って、ほ場に病害を「持ち込まない」「増やさない」「残さない」を合言葉に基本技術を徹底させることが必要です。

第2に、耕作放棄地の解消に向けてサツマイモの作付面積を増やすことが考えられます。サツマイモは苗の植え付けが終わると、その後は粗放的管理が可能となるので、生産者のあいだで根強い人気があります。ですから、基腐病のまん延が収束すれば、事態は改善の方向に向かうことが予想されます。

同時に、茶価が厳しい状況にあることから、お茶農家がサツマイモを導入するケースが増えていることにも注目しなければなりません。お茶の収穫シーズンとサツマイモの収穫シーズンが重ならないことが魅力です。

第3に、先生がおっしゃるように、JAとしてもサツマイモの収穫・輸送代行をするような作業班を組織して、集荷力を高めていかなければなりません。この集荷体制がスムーズに動き出せば、将来的にはダイコンなど畑作物全般にわたって拡大させることが考えられます。



澱粉工場では最新の設備と技術で高品質の澱粉が生産されている



農産物の輸送コストをいかに抑えるかが課題になっている

石田：もう一つの大きな問題は「物流2024年問題」です。これについてはどのような対策をお考えでしょうか。

山下：現在、鹿児島県経済連と詰め協議を行っているところです。鹿児島市内と福岡に中継基地を設ける方向で検討が進んでいます。

石田：ということは、県内各地の荷を

いったん鹿児島市内と福岡に集めて、そこから市場別に分けていくということですか？

山下：積み直すか、単なるリレーかは別にして、運転手を交代させることにしています。船便という手もありますが、日数がかかりすぎます。らっきょうなど他産地と一日を争うような品目では適当ではありません。

石田：鉄道便という手はないんですか？

山下：鉄道によるコンテナ輸送はいまも行っています。鹿児島県経済連の子会社である「JA物流かごしま」が、モーダルシフトの観点から以前から取り組んでいます。

もう一つの問題は、従来はトラックドライバーが荷物の積み下ろしをしていたのですが、これができなくなることです。JAでやってくださいねといわれています。

その対策として、パレット輸送の導入が考えられますが、これだと積み荷がパレット分だけ減るので、積載効率が下がってしまいます。積載効率の低下と作業効率の向上との比較が必要です。また、荷受側の事情もあるので、JA側の判断だけで決めることはできません。

パレットの大きさも、主流は1.1m×1.1mですが、それだけではないので、統一が必要となります。パレットの大きさを変えれば、段ボールの大きさも変えなければなりません。これらはJAでは決められないので、経済連が中心となって検討を進めています。

選果コスト、梱包コスト、輸送コストなど、いずれのコストも上昇しています。これらのコスト上昇分を農家の方々に転嫁できるかという点では簡単ではありません。またコスト上昇分を市場価格に転嫁できるかという点でも簡単ではありません。



パレット輸送のばあいにはどのくらいコストが上昇するか、実際には試算を行っています。しかし、そのコスト上昇分をだれが、どれだけ負担するか、という問題になると、模索は続けていますが、出口は見えていません。非常に悩ましい問題です。

(取材／2023年12月7日)

加世田——川野重任先生の出身地

加世田(現南さつま市)は南薩地域の商業の中心地といわれるが、農業面からいうと畑作の中心地でもある。同時に、わたしの恩師である、川野重任(かわのしげとう)東京大学名誉教授の出身地でもある。先生からは、鹿児島県人らしく「風呂は、どんなに遅く帰っても、わたしが一番風呂」と聞かされた思い出がある。

1911年7月22日に生まれ、奇しくも同じ2010年の7月22日に亡くなられた。99歳の大往生であった。暑い盛りの東京・護国寺で営まれた告別式には、わたしは仕事の都合上、急きょ、島根県出雲市から夜行バスで駆け付けたことが思い出される。

先生の出世作は『台湾米穀経済論』(1941年)で、これはいまでも名著とされている。後年、米価審議会や農政審議会の会長を務められたが、葉たばこ審議会の会長も務められた。たばこ事業の民営化後は、先生からのご指名で、国内外の葉たばこ産地調査を毎年のように行った。

今回の「加世田のかぼちゃ」も、春メロンの疾病対策のほか、葉たばこ零細農家の廃作によって産地化が進んだと聞かされた。このトップ対談のシリーズで、葉たばこ産地の話がしばしば出てくるのはそういう理由による。